

ミクタム詩編の特徴と起源(3)

著者	佐々木 哲夫
雑誌名	東北学院大学宗教音楽研究所紀要
巻	5
ページ	1-8
発行年	2001-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00000243/

〈論文〉

ミクタム詩編の特徴と起源 (3)

佐々木哲夫

旧約聖書の詩編 16編および56編から60編までの詩編は、表題に共通して記載されている用語ミクタム(מִקְטָם)の故に、ミクタム詩編と呼ばれている。これまで、これらの詩編の表題および詩編本体の構成に関する考察を報告してきた。¹ 本稿では、詩編本体の構成要素(祈願、嘆き、信頼、確信、賛美)に焦点を絞って考察し、ミクタム詩編に共通する特徴を見出そうと試みるものである。

6-1 祈願 (“petition”)

ミクタム詩編の祈願の部分に関し最初に指摘し得る特徴は、神名を用いての呼び掛けである。例えば、אלהים (God; 56:2a, 56:8, 57:2, 58:7, 59:2, 6, 60:12), אל (God; 14:1), יהוה (the Lord; 58:7, 59:6), אלהים (the Lord; 59:12) などである。祈願は、詩編 59 編 12 節の場合を除き、いずれも神への呼び掛けで始められている。

祈願には、肯定的祈願と否定的祈願の二種類の形式が認められる。肯定的祈願は詩人に対する神の肯定的祝福を祈願する場合であり、否定的祈願は敵に対する神の裁きの到来を求める場合である。例えば、「守ってください (שָׁמְרָנִי 16:1), 「憐れんでください (רַחֵם־נִי 56:2a, 57:2)」「助け出してください (צַדִּיקִי 59:2, 3, 60:7)」「助けて

ください(הִצֵּל־נִי 60:13)」などの祈願は、詩人の直面している悪い状況が良い方向へ変化することを祈願しており、肯定的祈願と理解される。² 他方、否定的祈願は「屈服させてください (הוֹרֵד 56:8)」「抜き去ってください。折ってください(נָתַץ/הָרַס 58:7)」「流れ去るがよい。衰え果てるがよい (יִתְמָלֵךְ/יִדָּח/יִמָּאֵס 58:8)」「動揺させ屈服させてください(הִיַּיְעַמוּ/הוֹרִידֵמוּ 59:12)」「絶やしてください (כִּלֶּה 59:14)」などの表現に見出せる。肯定的祈願は、単独もしくは否定的祈願と共に用いられる。しかし、詩編 58 編では、否定的祈願のみの記述となっており、呪いの特徴 (imprecatory nature) が顕著である。

祈願の動機は、嘆きや信頼に暗示されている。例えば、嘆きの「わたしは人に踏みにじられています。戦いを挑む者が絶えることなくわたしを虐げ、陥れようとする者が絶えることなくわたしを踏みにじります (56:2-3)」「彼らの不法のゆえに (56:8)」「力ある者がわたしの命をねらって待ち伏せし争いを仕掛けて来ます。罪もなく過ちもなく悪事をはたらいたこともないわたしを打ち破ろうとして身構えています (59:4-5)」また、信頼の「あなたを避けどころとするわたしを (16:1)」「わたしの魂はあなたを避けどころとし、災いの過ぎ去るまで、あなたの翼の陰を

避けどころとします(57:2)」などが祈願の動機を暗示している。他方、詩編 58 編には祈願の動機が記載されておらず、呪いの特性をさらに顕著なものにしている。ミクタム詩編の祈願部分の特徴を(1) 神名を伴う神への呼び掛け、(2) 詩人もしくは敵対者に対する神の介入の祈願、(3) 祈願の動機、に区分し表 4 にまとめた。

(数字は節の数)

Term \ Pss	16	56	57	58	59	60
A	1	2a, 8	2	7	2, 6	12
	2			7	6	
	3				12	
	4	1				
B	1	1	2a	2	2, 3	7, 13
	2		8	7, 8, 9	12, 13, 14	
C	1		2, 3, 8			
	2	1, 2		2		11, 12

A…神への呼びかけ

1. יְהוָה יִשְׁמָע 2. יְהוָה יִשְׁמָע 3. יְהוָה יִשְׁמָע 4. יְהוָה יִשְׁמָע

B…祈願

1. 肯定的祈願 2. 否定的祈願

C…祈願の動機

1. 嘆き 2. 信頼

表 4 祈願の特徴

6-2 嘆き (“lament”)

嘆きの詩編の特徴的要素は当然のことながら「嘆き」である。ミクタム詩編の嘆きの部分を概観するとき最初に気づく特徴は、詩編 60 編だけが「あなたは大地を揺るがせ、打ち砕かれた。どうか砕かれたところを癒してください。大地は動揺しています

(60:4)」というように神の怒りを自然災害に類比させていることである。このような描写の故に、詩編 60 編を個人ではなく共同体的嘆きの詩編に分類することが多い。³

詩編 56-59 編の嘆きの部分に共通する特徴として、以下の項目を指摘し得る。⁴

(1) 嘆きは、詩人が直面している困難な状況の描写となっている。例えば、「命を奪おうとして後をうかがいます(56:7)」「わたしの魂は獅子の中に、火を吐く人の子らの中に伏しています(57:5)」「力ある者がわたしの命をねらって待ち伏せし、争いを仕掛けて来ます(59:4)」などの表現である。描写はいずれも真に迫ったもので、詩人の困難な状況を鮮明に伝えている。「わたしの魂 (נַפְשִׁי)」の表現が詩編 56, 57, 59 編に記載されているが詩編 58 編に見出せない。それは、詩編 58 編の呪いの特性に起因している現象と考える。即ち、詩人自身の安全ではなく敵対者の裁きが表現の主眼点になっているからである。

(2) 敵対者の虚偽性が全面に出されている。例えば「彼らの歯は槍のように、矢のように、舌は剣のように、鋭い (57:5)」「欺いて語る者は母の腹にあるときから迷いに陥っている (58:4)」「彼らの口は剣を吐きます。その唇の言葉を誰が聞くに堪えるでしょう (59:8)」などである。また、敵対者の邪悪さも表現されている。例えば、「不正に満ちた心 (56:6, 58:3)」「命をねらって待ち伏せし (56:7, 59:4)」「待ち構えて争いを起こし (56:7, 59:4)」などである。

(3) 詩人は、敵対者を獣に譬える。例えば、「獅子(57:5)」「蛇(58:5)」「犬(59:7, 15)」

などである。

詩編 58 編に若干の相違がみられるものの、詩編 56-59 編をひとまとまりの詩編群とみなすことができる。ミクタム詩編の嘆きの部分の特徴を表 5 にまとめた。

(…その用語や表現が記載されている)

Term	Pss					
	16	56	57	58	59	60
A. נַפְשִׁי "my soul"		*	*		*	
evil speaking			*	*	*	
B. evil thought		*		*		
lie in wait		*			*	
stir up strife		*			*	
C. 動物 との対比			*	*	*	

表 5 嘆きの特徴

6-3 信頼 ("trust")

神への信頼の告白は、三つの部類に細分化し得る。第一の部類は、神への呼びかけである。例えば、「あなたはわたしの主 (16:2)」「私はいと高き神を呼びます (57:3)」「あなたは主、万軍の神、イスラエルの神 (59:6)」「しかし主よ (59:9)」「神よ、あなたは…(60:12)」などである。第二の部類は、詩人の信仰告白である。例えば、「あなたのほかにわたしの幸いはありません (16:2)」「わたしは血を注ぐ彼らの祭りを行わず、彼らの神の名を唇に上らせません (16:4)」「恐れをいだくとき、わたしはあなたに依り頼みます。神に依り頼めば恐れはありません (56:4-5)」「わたしの魂はあなたを避けどころとし、災いの過ぎ去るまであなたの翼の陰を避けどころとします

(57:2)」「まことに神はわたしの砦の塔 (59:10)」「包囲された町に誰がわたしを導いてくれるのか。エドムに誰がわたしを先導してくれるのか (60:11)」などが挙げられる。第三の部類は、神が報いを与える、もしくは、正しい者を保持する、と告白する信頼である。例えば、「主はわたしの運命を支える方…わたしは輝かしい嗣業を受けました (16:5-6)」「神を呼べば、敵は必ず退き、神はわたしの味方だとわたしは悟るでしょう (56:10)」「わたしのために何事も成し遂げてくださる神を…天から遣わしてください、神よ、遣わしてください、慈しみとまことを (57:3-4)」「神はわたしに慈しみ深く先立って進まれます。わたしを陥れようとする者を神はわたしに支配させてくださいます (59:11)」「神よ、あなたは我らと共に出陣してくださらないのか (60:12)」などの表現が挙げられる。上述の考察をまとめたのが表 6 である。ところで、詩編 58 編に信頼の部分が存在しないのは、やはりこの詩編の特徴である呪いの故であろう。詩編 60 編では、修辭疑問文の形式によって詩人の確かな神への信頼が表明されている。

(数字は節の数)

	16	56	57	58	59	60
A	2	—	3	—	6a, 9a	12a
B	2, 4	4, 5a	2a	—	10	11
C	5, 6	5b, 10	3, 4	—	9b, 11	12b, 14

A…神への呼びかけ

B…詩人の信仰告白

C…神の報い、もしくは、正しい者の保持

表 6 信頼の特徴

6-4 確信 (“confidence”)

詩人の信頼が神の介入前に語られるのに対し、確信はその後に語られている。神の介入とは、敵対者を敗北へ、もしくは、信仰者を救いへと導く出来事である。例えば、「あなたは死からわたしの魂を救ってくださった (56:14)」「その中に落ち込んだのは彼ら自身でした (57:7)」「神に従う人はこの報復を見て喜び (58:11)」などの表現に見られる。詩編 16 編の確信部分「あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく、あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず、命の道を教えてください。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い、右の御手から永遠の喜びをいただきます (16:10-11)」は、賛美部分「わたしは主をたたえます。主はわたしの思いを励まし、わたしの心を夜ごと諭してください (16:7)」の記事と合わせて理解するならば、神との親密な関係に裏打ちされていることが分かる。また、詩編 60 編 8-10 節の確信部分「神は聖所から宣言された。『わたしは喜び勇んでシケムを分配しよう。スコトの野を測量しよう…』」は、神の介入を婉曲的に表現している。

また、確信の部分には、神の介入の描写と共に詩人の喜びの表現も記述されている。例えば、「わたしの心は喜び、魂は躍ります (16:9)」「わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い、右の御手から永遠の喜びをいただきます (16:11)」「神よ、あなたに誓ったとおり感謝の献げ物をささげます (56:13)」「神よ、わたしは心を確かにしてあなたに賛美の歌をうたいます (57:8)」神

に従う人はこの報復を見て喜び (58:11)」などの表現である。ミクタム詩編の確信部分の特徴は表 7 の通りにまとめられる。

(数字は節の数)

Term \ Pss	16	56	57	58	59	60
A	—	—	7d	10 11d 12	—	8-10
B	10 11a	14	—	—	—	—
C	9 11d	13b	8	11a	—	—

A…神の介入 (裁き)

B…神の介入 (救い)

C…詩人の喜び

表 7 確信の特徴

6-5 賛美 (“praise”)

賛美は、賛美する主体者およびその対象者に言及する二つの部分から構成される。例えば、「神よ、わたしは心を確かにしてあなたに賛美の歌をうたいます (57:8)」は前者に、また「あなたの慈しみは大きく、天に満ち、あなたのまことは大きく、雲を覆います (57:11)」は後者に分類される。賛美の構成は表 8 の通りにまとめられる。

(数字は節の数)

Term \ Pss	16	56	57	58	59	60
A	7, 8	11	8c, 10	—	17a, 18a	—
B	—	—	6, 11, 12	—	17b, 18b	—

A…賛美の主体者

B…賛美の対象者

表 8 賛美の特徴

詩編 16, 56, 57 編の賛美は、信仰の確信と直接的に関連している。即ち、賛美と確信

は表裏一体の表現形式である。詩編 59 編に確信部分を見出せないが、賛美部分「あなたはわたしの砦の塔、苦難の日の逃れ場 (59:17b)」に信仰の確信を読み取ることができる。詩編 57 編における賛美部分の強調は、特徴的である。

6-6 ミクタム詩編の特徴

上記の考察から、ミクタム詩編に関しいかなる特徴が浮き彫りにされるであろうか。順次吟味してゆきたい。

詩編 16 編は、ミクタム詩編の中でも特異な特徴を示している。例えば、詩人は、困難な状況からの救いや敵対者の裁きを祈願するのではなく、むしろ既に確立されている平安な状態を維持するように願っている。また、嘆きの部分には敵対者を裁く神の介入に関する記述がない。詩人の関心は、もっぱら、既存の信仰深い関係をしっかりと維持することにある。このような内容は、一般的な嘆きの詩編の特徴を超越している。詩編 16 編の特徴は、確信 (9-11 節) にある。この箇所は新約聖書にも引用されているいわゆる「メシヤ詩編 (messianic psalm)」の部分でもある。恐らく、詩人が抱いた熱情は、嘆きを神に訴えることではなく、メシヤを待望するほどに強い信仰の確信を表明することだったと思われる。このような視点から評価するなら、詩編 16 編は、信仰の確信が強調された詩編と言える。

詩編 56 編は、全ての要素を備えている。全体的様相は、困難な時にあっても全霊をもって信仰を貫こうとする詩人の意識であ

る。即ち「陥れようとする者が絶えることなくわたしを踏みにじます (56:3)」「恐れをいだくとき (56:4)」「人々はわたしに対して災いを謀り (56:6)」「あなたの革袋にわたしの涙を蓄えてください (56:9)」「肉にすぎない者がわたしに何をなしえましよう (56:5, 12)」などの表現が示す通り、困難な状況に対する嘆きこそこの詩編の特徴である。構成は、典型的な嘆きの詩編のそれである。

詩編 57 編は、相対的に長い賛美の部分を有している。9 節から 12 節の部分は、詩編 108 編にも見出される。賛美と比較すると祈願や嘆きの部分は非常に短い。詩編本体の以上のような構成は、詩編 56 編と同様、標題の内容と整合する。

詩編 58 編は、57 編と対照的に、長い嘆きと祈願の部分を持っている。それは、いわゆる呪いの詩編と呼称されるほどの特徴である。敵対者に裁きを求める呪いの語調は、確信の部分 (11-12 節) にも見出せる。詩編 58 編を 57 編と連続する詩編として概観するならば、一方が他方に欠けている要素を補完しており、57 編と 58 編の全体の構成と内容は一つの嘆きの詩編になっている。この分析は、曲名「滅ぼさないでください」の共有や詩編全体の長さの類似 (同じ節数) などからも支持される。また、詩編 57 編の標題の歴史記述が詩編 58 編を包含していると想定される。

詩編 59 編では祈願が特徴的である。全体を構成している 18 節の中で、祈願の部分は 6 節を数える。また、祈願の動機を説明する嘆きや信頼の記事を含めるならば、全体

の半分の節が祈願を構成する部分になる。

詩編 60 編の表現形式は、他のミクタム詩編と異なっている。例えば、嘆きは自然災害に譬えられ、神の裁きや信頼の告白は修辭表現をもって描写されている。また、神の介入は神の宣言として提示されているだけで、具体的出来事として実現したなどの描写は見出されない。それ故、敵対者の裁きや詩人の救いを扱う賛美も見出されないのである。必然的に、詩人の期待、即ち、神に対する信頼の告白と祈願がこの詩編の結びとなっている。以上の考察をまとめるならば、既存の安寧を維持するよう願う詩編 16 編と安寧の実現を期待する 60 編の内容の対照的であることが浮き彫りにされる。

各詩編の強調点を表 9 にまとめた。

Psalms	詩編の強調点
16	確 信
56	嘆 き
57	賛 美
58	裁 き
59	祈 願
60	信 頼

表 9 ミクタム詩編の強調点

これらの強調点が各詩編の構成と内容の多様性を説明するが、他方、各ミクタム詩編に共通する基本類型として「嘆きの詩編」を想定することは充分可能である。この視座から再度詩編 16 編を概観するならば、16 編を嘆きの詩編であると想定する考察は妥当だと言える。

ミクタム詩編の分析結果を、さらに、他の嘆きの詩編全体との比較検討によって検証する必要がある。

6-7 他の嘆きの詩編との比較

個人的な嘆きの歌として挙げられる詩編は、詩編 3, 5-7, 17, 22, 25-28, 35, 39, 41, 42-43, 51, 54-57, 59, 61, 63-64, 69, 71, 86, 88, 102, 109, 130, 140-141, 143 である。⁵ 詩編と評価されたミクタム詩編と、上記に挙げた嘆きの詩編を比較検討し、それらの相違を吟味する。

これまでの分析を通して明らかにされたミクタム詩編の特徴として、嘆きの歌としての特徴だけでなく、以下に列挙される項目をも指摘し得る。

(A) 詩人は、差し迫った危機的状況の中に置かれている。他の嘆きの詩編においてもこのような危機的状況が看取されるであろうか。

(B) 描写が個人的で直接的である。危機的状況が差し迫ったものであるならば、嘆きの表現は直接的で簡潔になり、緊迫感溢れるものとなる。そのような描写が他の嘆きの詩編にも看取されるであろうか。

表 10 は、(A) と (B) に関連する記述箇所を示している。

Pss.	A	B
3	2-3, 6	4-5
5	2-8	
6		2-4

7	7-10	
17		14-15
22		10-11, 28-32
25	1-3, 11	12-15
26	1-12	
27	7-14	4
28	4, 9	
35	17-28	
39	5-12	2-4
41	2-4	
42	4-5	
43	1	3-4
51	3-6	7-11, 18-19
54	3-4, 8	
55	10-16	23
61	6-8	
63	2-4	5-9
64	3	6-9
69	8-13, 20-22	2-5
71	1-3, 9-14	15-20
86	1-5	6-11
88	7-13	
102	9-12	4-8, 19-29
109	6-20	27-28
130	5-6	
140	7-12	
141	3-6	2
143	5, 8, 10	

表 10 他の嘆きの詩編との比較

表 10 に挙げられた嘆きの詩編を概観するとき、ミクタム詩編に看取された緊迫感溢れる表現がそれほど表面にでていないことに気がつかれる。例えば、前述の (A) に関しては「身を横たえて眠り、わたしはまた、目覚めます。主が支えていてくださいます (3:6)」 「諸国をあなたの周りに集わ

せ、彼らを超えて高い御座に再び就いてください (7:8)」 「偽りの証人、不法を言い広める者がわたしに逆らって立ちました (27:12)」 「敵が不当に喜ぶことがありますのように。無実なわたしを憎む者が侮りの目で見ることがありませんように (35:19)」 など詩人に少しく余裕があることが看取される。また、(B) については「しかし、御もとに隠れる人には豊かに食べ物をお与えください。子らも食べて飽き、子孫にも豊かに残すように (17:14)」 「主よ、わたしは手を洗って潔白を示し、あなたの祭壇を廻り 感謝の歌声を響かせ、驚くべき御業をことごとく語り伝えます (26:6-7)」 「わたしは口を閉ざして沈黙しあまりに黙していたので苦しみがつり、心は内に熱し、呻いて火と燃えた。わたしは舌を動かして話し始めた (39:3-4)」 「涸れた谷に鹿が水を求めるように、神よ、わたしの魂はあなたを求める (42:2)」 などの表現はそれほど直接的でない。これらは、詩人の危機的状態がミクタム詩編の場合ほど差し迫っておらず、命が危機に瀕している状況ではない故であると理解される。

6-8 まとめ

ミクタム詩編の嘆きや祈願の表現が直接的で緊迫感溢れる描写であるというこれまでの考察から、ミクタム詩編は個人的詩編であると同定する。冗長な表現は、詩人の直面している危機的な状況を表現する緊迫感をそぐ恐れがあるので用いられなかったであろう。即ち、ミクタム詩編は、詩人

が置かれている困難な状況、もしくは、危機的状況から離脱した直後の状況を直接的に歌ったものと考えられる。この詩編が歌われた第一義的目標として、神殿での犠牲や祭儀を想定する必然性は導かれぬ。しかしながら、確かに、詩編 60 編は、個人的というよりは共同体的もしくは国家的内容である。即ち、国家的危機に際し、イスラエルがどのように神に信頼するかを歌ったものであろう。そのことは、標題「教えのためのダビデのミクタム (60:1)」からも示唆される。もっとも、これらの推察は、ミクタム詩編が後代においてイスラエルの祭儀において用いられた可能性を否定するものではない。

嘆きの部分を持たず信仰の確信に強調点を置く詩編 16 編は、困難な経験を想起させることによって人々の信仰を覚醒せしめ、信仰の確信をさらに強化する意図を持つ詩編であると推察される。詩編 16 編の構成や内容の特異性の故に、他のミクタム詩編と分離されて収載されと考えられる。

ミクタム詩編は、詩人の個人的体験の記録として書き留められ、危機的状況から離脱した後、今日に伝わる構成を持つ詩編として編纂・編集されたのであろう。その編纂・編集過程において、各ミクタム詩編は、特有な強調点を持つ多様な形式をまといながらまとめられたのであろう。

ミクタム詩編の起源に関する考察をさらに深めるために、旧約聖書に収載されている類似の詩編や古代オリエントの資料などとの比較検討を行う必要があると考えている。そのことについては、稿を改めて報告

したいと願っている。

注

- ¹ 拙論「ミクタム詩編の特徴と起源 (1)」『東北学院大学宗教音楽研究所紀要』第 4 号 (2000 年) 1-8 頁。拙論「ミクタム詩編の特徴と起源 (2)」『東北学院大学論集—教会と神学—』第 33 号 (2001 年) 印刷中。
- ² しかし、16 章 1 節は、危機的な状況からの救いではなく、既に与えられている安寧の継続を祈願している。Anderson, *Psalms*, 1:141.
- ³ Thirtle は、表題の「教えのためのダビデのミクタム」の記述を根拠に個人的詩編と想定している。Thirtle, *The Titles*, 136.
- ⁴ 詩編 16 編に関しては本稿の後半部分で詳述している。
- ⁵ Anderson, *Psalms*, 1:38.